

建築空間の光とあかりに関する考察

地 濃 茂 雄

はじめに

あかりの歴史は人類の歩みとともに始まり、先人の闇への挑戦を経て、人々の暮らしを豊かなものにしてきた。とりわけ現代の生活は、昼夜を問わず電灯の光によって照らされている。こうした中、建築空間を構成する上での光とあかりは、単に機能的・環境的な効用だけでなく、空間表現の手法として重要な役割を果たすものと言える。

ここでは趣ある風景と心の豊かさの視点から、建築空間における光とあかりについて概観し、その振る舞いに対して幾つかの考察を加えたものである。

1. 火のあかり宿る

かつて、新潟県南魚沼市の「雪国あかり展」⁽¹⁾に足を運んだ。そこでは、江戸時代以降の灯火具が展示されていた。

その昔、この地域の人々は、約半年の間、雪に閉ざされる生活を余儀なくされた。屋内はいつも闇。それだけに、昼夜を問わず「あかり」が必要だったと言われている。電球のない時代、頼れるのは火のあかり。灯火具は雪に閉ざされた人々に必要不可欠なものとなり、その形や機能、役割が地域独特な生活文化を培ってきたことと推察される。

つまり、闇を照らす「あかり」は、時間、場所、季節に応じ幾つもの表情をみせたに違いない。それは、厳しい日常生活の中から創意工夫によって編み出された、かけがえのない行灯（あんどん）や提灯（ちょうちん）や燭台（しょくだい）であったのだろう。

当時、いかに必要不可欠な道具であったか、また大切に守り育てられてきたかは、その地でその道具に触れてみて初めてわかることである。言わば、灯火具に火のあかりが宿っている。だからこそ、今に受け継がれているのではないかと思える。



写真1 春を待つ風物詩・百八灯(新潟県しおぞわ雪譜まつり)

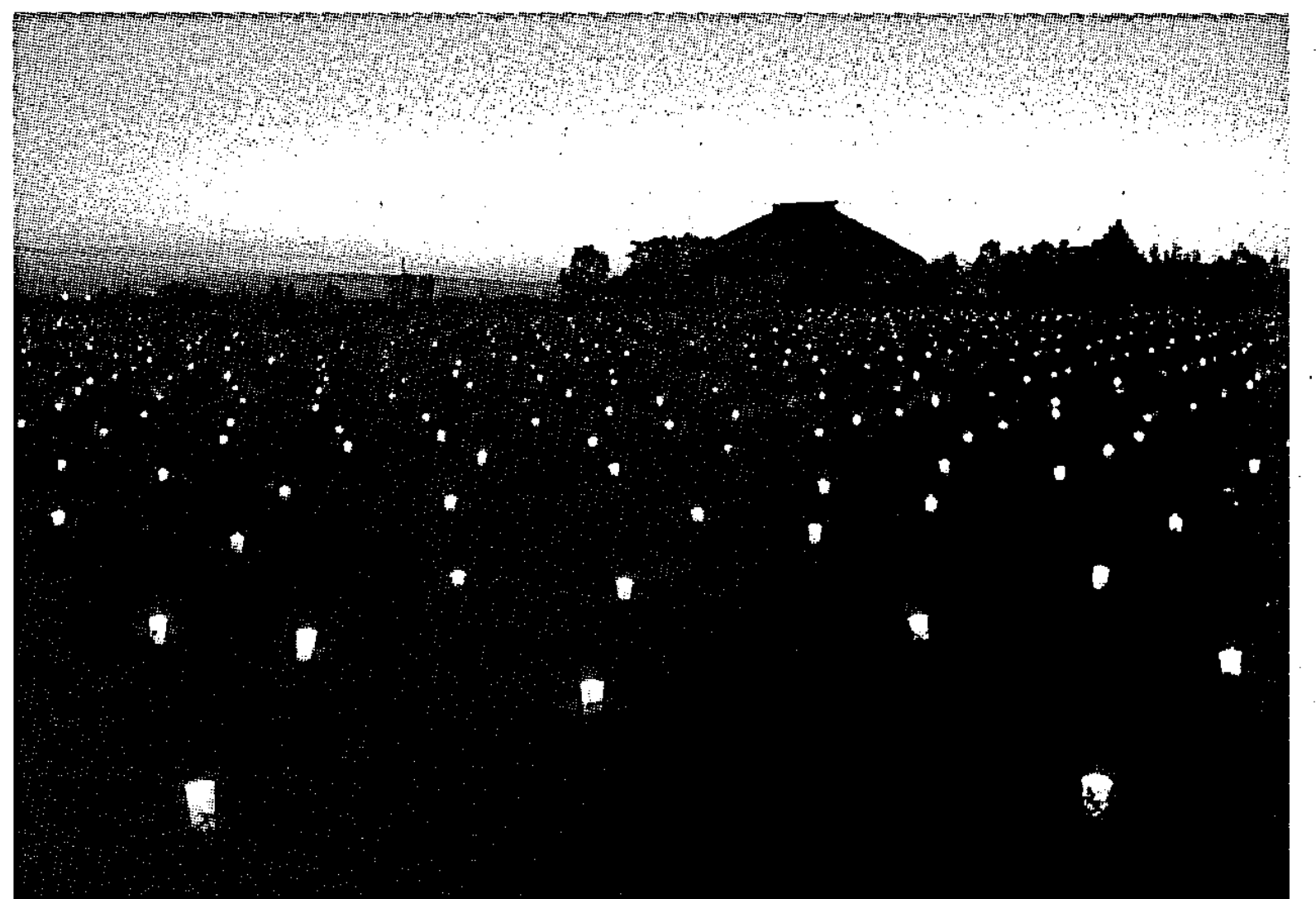


写真2 あかりの連呼・雁迎灯(新潟県福島潟)

とりわけ、雪国の人々にとって、春を待つ心は生命が躍動する喜びへの期待でもある。

その証として、地域社会に根づいた火のあかりが、春を待つ行事として今なお生き続け、「百八灯（新潟県しおぞわ雪譜まつり）」⁽²⁾がこの地で展開されている。雪とろうそくのあかりが見事に調和し、幻想的な美の世界が創り出される。あかりに寄せた昔の人々の思いが手に取れる。

長い冬から希望の春へ。人々の心を導いてくれるあかりは、まさに火のあかりと言えよう。

こうした風物詩は、時代の移り変わりとともに、例えば、「雁迎灯（新潟県福島潟）」⁽³⁾や「NIIGATA光のページェント（新潟市中央区）」⁽⁴⁾などに息づいているものと考えられる。

ちのう しげお
新潟工科大学 工学部建築学科
〒950-0824 新潟市東区中島2-6-2（自宅）

2. いにしえ・あかりの文化

動植物からとった油や蠟を燃料とした灯火具によって、あかりの文化が培われてきた。

例えば行灯。文字通り携帯用として、風除けのために火皿の周りを和紙で囲ったのが始まりである。それが江戸期に入って、ろうそくを使った行灯が普及したため、主に室内灯として使われるようになった。

行灯は部屋の一ヶ所に置かれ、その周りを照らす。

それゆえ、身分や職業等により、その形態や素材は千差万別。従って、いろいろな行灯が考案された。造形に凝ったものや行灯皿（火皿や油差しから垂れる油を受けるための皿）まで芸術品として、中には花鳥や山水が描かれた焼き物までが出現している。いずれも趣が深く、心豊かな文化が見て取れる。

こうしたことは恐らく、着物の文化にも行灯が影響したのではないかと考えられる。

それは訪問着（ほうもんぎ）や付け下げなどの模様づけの位置が、行灯の高さに一致している。つまり、正座時には肩山や袖の模様が、立ち振る舞い時には袖の模様が、ほのかなあかりに照らされる。

提灯においても文化の薫りは漂う。

竹ひごと和紙の日本特有な素材を用いて、伸縮自在に作られた提灯。この見事なアイデアに感心させられる。それを代表しているのが箱提灯や弓帳提灯（別名：火消提灯）。それに御用提灯、小田原提灯、盆提灯、祭提灯等その形状や用途から当時の生活様式が垣間見られる。

例えば箱提灯。上下に畳むと上蓋が下蓋に重なって箱になる。吉原遊郭では、花魁（おいらん）提灯とも呼ばれ、その大きさと華やかさとを競いあったに違いない。

燭台にも多彩なバリエーションのものが生み出されている。陶製のものや自然木を生かした素朴なものなど、種類は実に多い。

そして、その燭台の周囲に和紙などを覆いつけたものを「ほんぼり」と呼び、この語源は「ほんのり」が転言化したものと伝えられている。周囲をほんのりと優雅に照らす光景は、今に伝わるひな祭りから実感できる。

さらに、ひょうそく（お椀形や壺形をした陶製の灯油用灯火具）も作り出されている。全国各地の窯でさまざまな色や形のものが焼かれ、いずれも小ぶりで可愛い。この他、灯芯や油差しなどの灯火具からも文化性が読み取れる。

このように、江戸時代を通して灯火具は固有な文化を育み、やがて幕末から明治期にかけて登場した石油ランプ⁽⁵⁾、ガス灯⁽⁶⁾、電灯⁽⁷⁾と言った「新しいあかり」⁽⁸⁾に置き換えられ、そして現在、蛍光灯が日本の住まいや都市を煌々と照らし出すに至った。



写真3 灯火具（行灯と行灯皿）

「暮らしを一変させたあかり」とは言え、ほんのりとしたあかりや揺らぐあかりに、今だ魅せられるのも、江戸時代から培われてきた情緒的な感覚が現代人の体内に根づいているからだと推察される。

ともかく日本特有な木や土や紙を素材として、手作りにより編み出された灯火具。その生命あるあかりは色濃く息づいていると言えよう。

3. 陰翳は時代の重み

「空・寂」で知られる谷崎潤一郎は、著書で「美と言うものは常に生活の実際から発達するもの」と記述している⁽⁹⁾。氏はさらに、「暗い部屋に住むことを余儀なくされた我々の祖先は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがて美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依って生まれているので、それ以外に何もない」と説いている。

改めて考えてみると、伝統的な日本の住まいは、降雨や高温多湿の気候風土を見据えて庇を深く出している。

深い庇の下に入ってくる光。庭先に敷いた玉石からの反射光。時には障子によって和らぐ。まさしく氏が指摘している陰翳の美しさかも知れない。こうした住まいの光の移ろいは、方位によって異なる様相を見せ、灰色の壁はほのかな暗さで際立つ。

そうした自然光を巧みに生かした設えに、先人の美に対する知恵が読み取れる。「暗い所に照明を使う」と言う西洋人の発想とは全く異なるものと言えよう。

マイナスを受け入れ、それを見事に転化した日本の建築空間。美しい光が、スーッと部屋に差し込む情景には時間を忘れてしまう要素が存在する。柱と柱の間を通



写真4 日本の古典建築、陰翳の美しさ（京都龍安寺）

して展開する自然界との融合。新鮮な空気、心地よい風、虫の音、月のあかりなど、自然界の恵みをそこに享受できる。

ブルーノ・タウト⁽¹⁰⁾はこうした空間を、「まず部屋の障子が閉められてある時のその落ち着いた感じと、そして障子が押し開けられると、絵のような庭が、家の一部分となって忽然と、だが圧倒するような力で迫ってくる。その点が素晴らしい」と外国人の視線からも絶賛している。

同様にエドワード・S. モース⁽¹¹⁾も、「自国で住み慣れていた、あの窒息しそうな部屋部屋を、快い気分でも思い起こすことは到底できない」と欧米にはない繊細さを評価している。

要するに、日本の古典建築は陰翳礼賛。

つまり「薄暗さ」に対して非常にセンシビリティを持っていたとも言える。

4. 西洋は差異化の美学

「薄暗さ」の対極に映し出されるのは西洋の古典建築と考えられる。

古典建築を「光と影」と捉えたル・コルビュジェ⁽¹²⁾は著書で、「光に照らされた、円錐や球、立方体などの幾何学的な形態が一番美しい」と記述している。

つまり、光が当たる立体とその影。その明快な自然との差（差異化）こそが西洋の美学と位置づけられる。

例えば天井に孔を開け、大胆に陽光を取り入れたパンテオン⁽¹³⁾。そこには日本の「ぼんやり」と言うような感覚は通用しにくい。

同様にゴシック建築⁽¹⁴⁾の聖堂。そのステンドグラスからも差異化の美学がうかがえる。

ステンドグラスを媒介することによって、光は完全に変質することを生かし、自然と人工をはっきり区別するために色を噛み合わせている。

一方これとは別に絵画の分野において、印象派の誕生

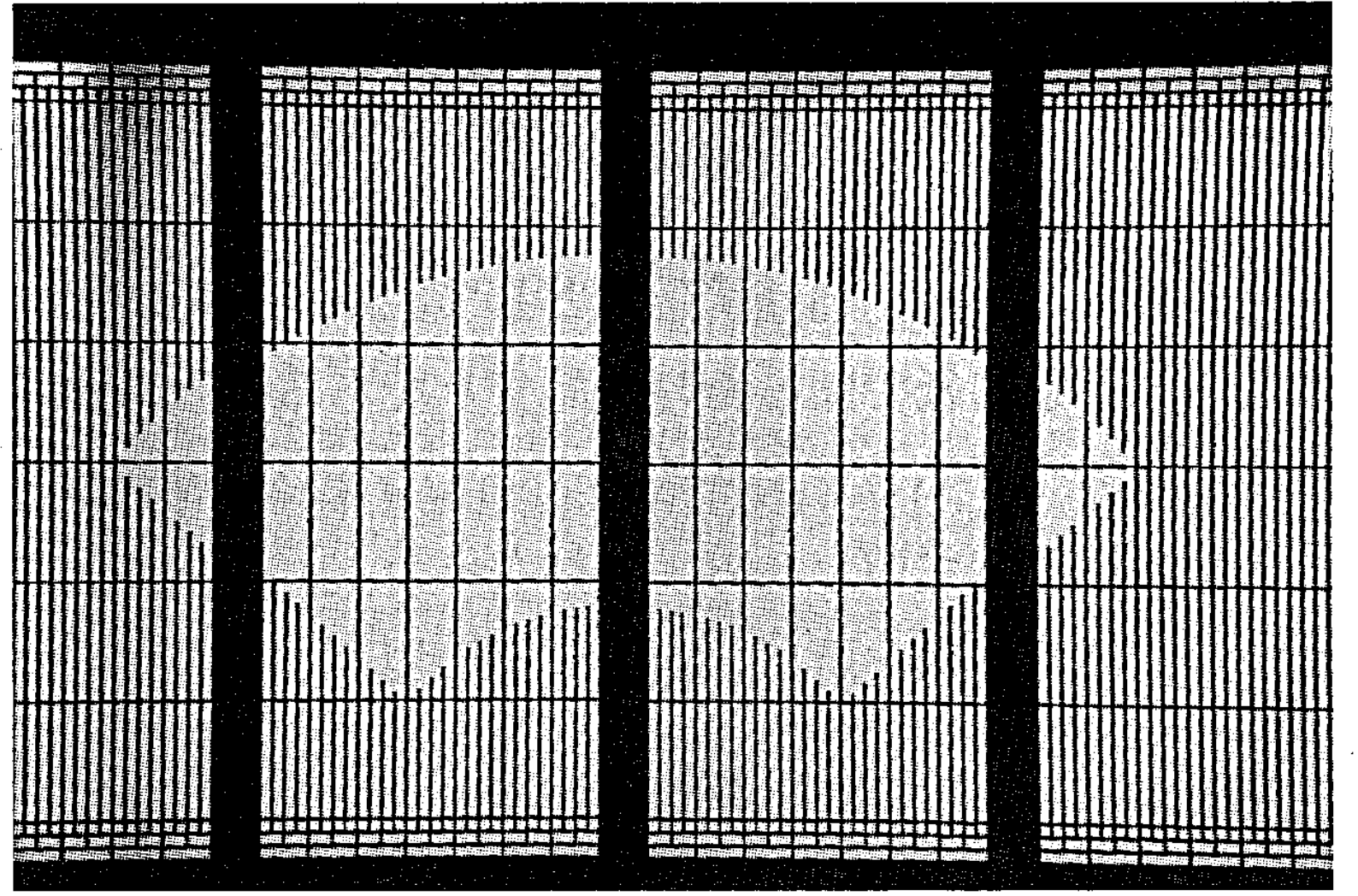


写真5 あかり障子、巧みな設え

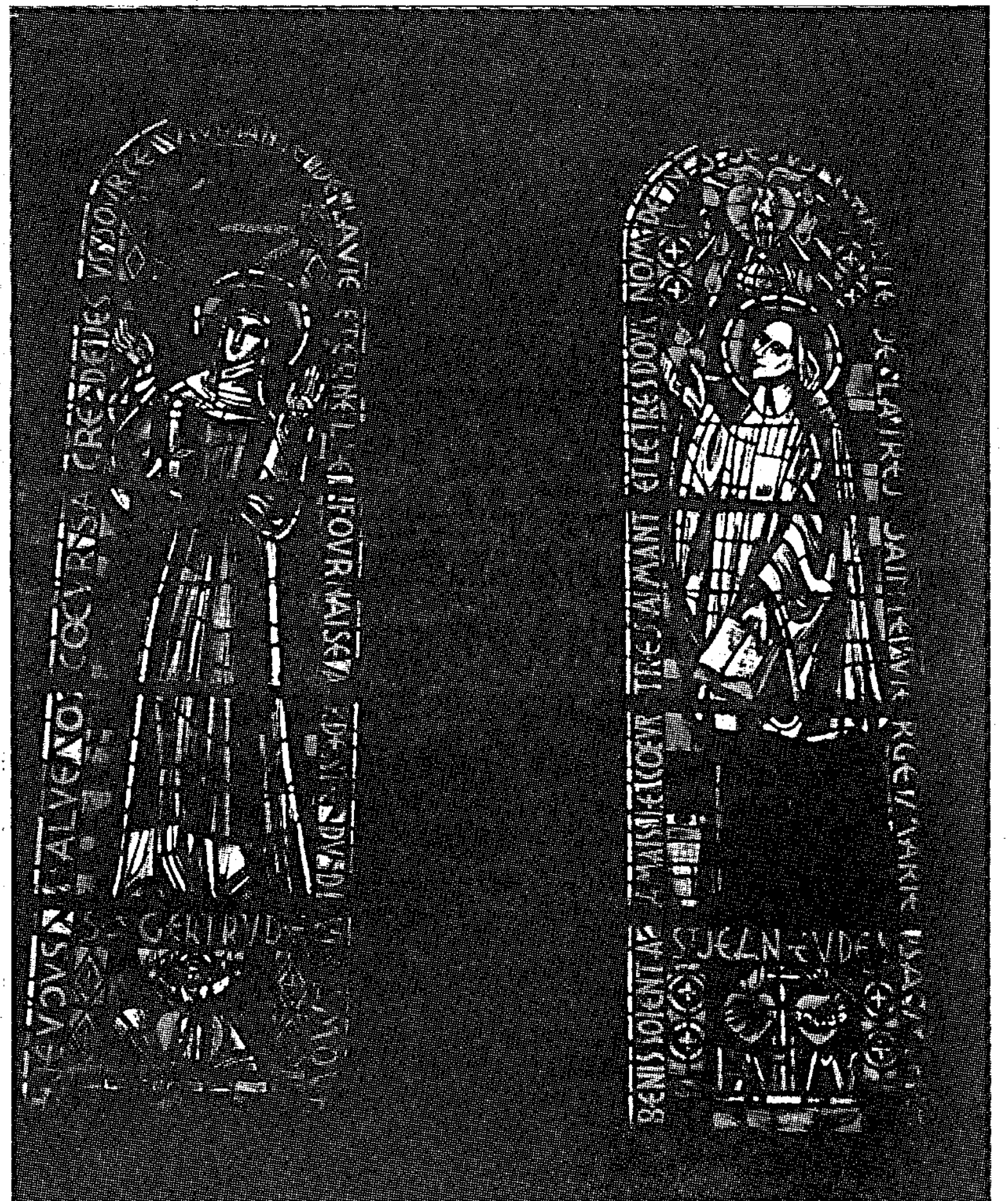


写真6 ステンドグラス（シャルトル大聖堂）

が対極に映し出される。

それは19世紀後半、フランスの画壇から興った印象派。それまでの絵は、室内の暗い照明の下で描かれ、影の部分を強調した写実本位のものが主流だった。それが1840年代チューブ入り絵の具の開発によって、画家たちは野外へ飛び出すことができるようになった。こうしたことで降り注ぐ光の下での絵画表現が可能になった。光はさまざまな色を見せてくれる。そこに影の部分を強調した写実本位のものとは趣を異にするほんのりとした色彩の絵が生まれたのである。

しかし当初、評判はさんざん。それがやがて美術界の主流となり、光の表現を大切にした印象派の評価が高くなったものと考えられる。

印象派として知られるクロード・モネ⁽¹⁵⁾やオーギュ

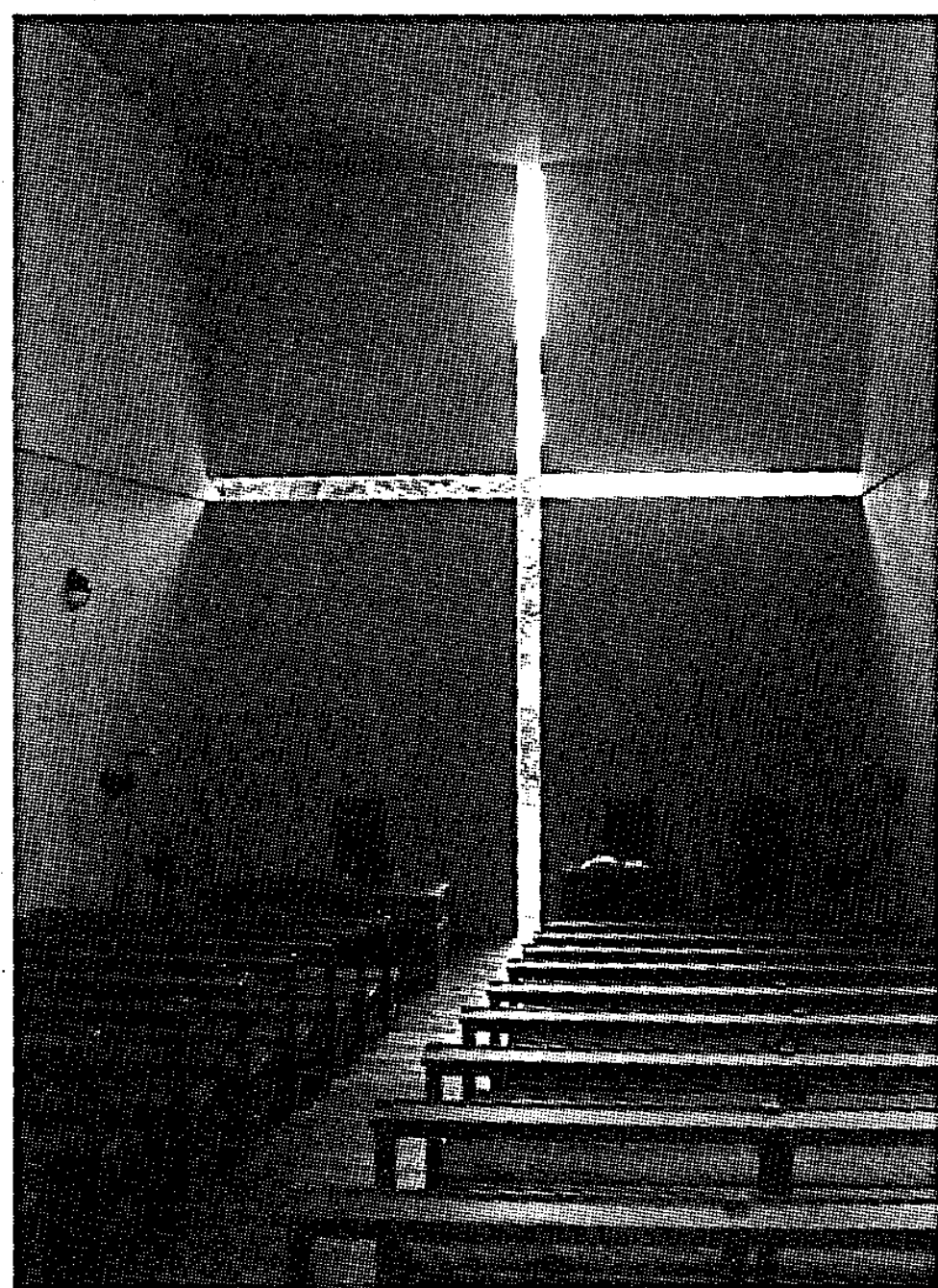


写真7 光の教会(設計・安藤忠雄)

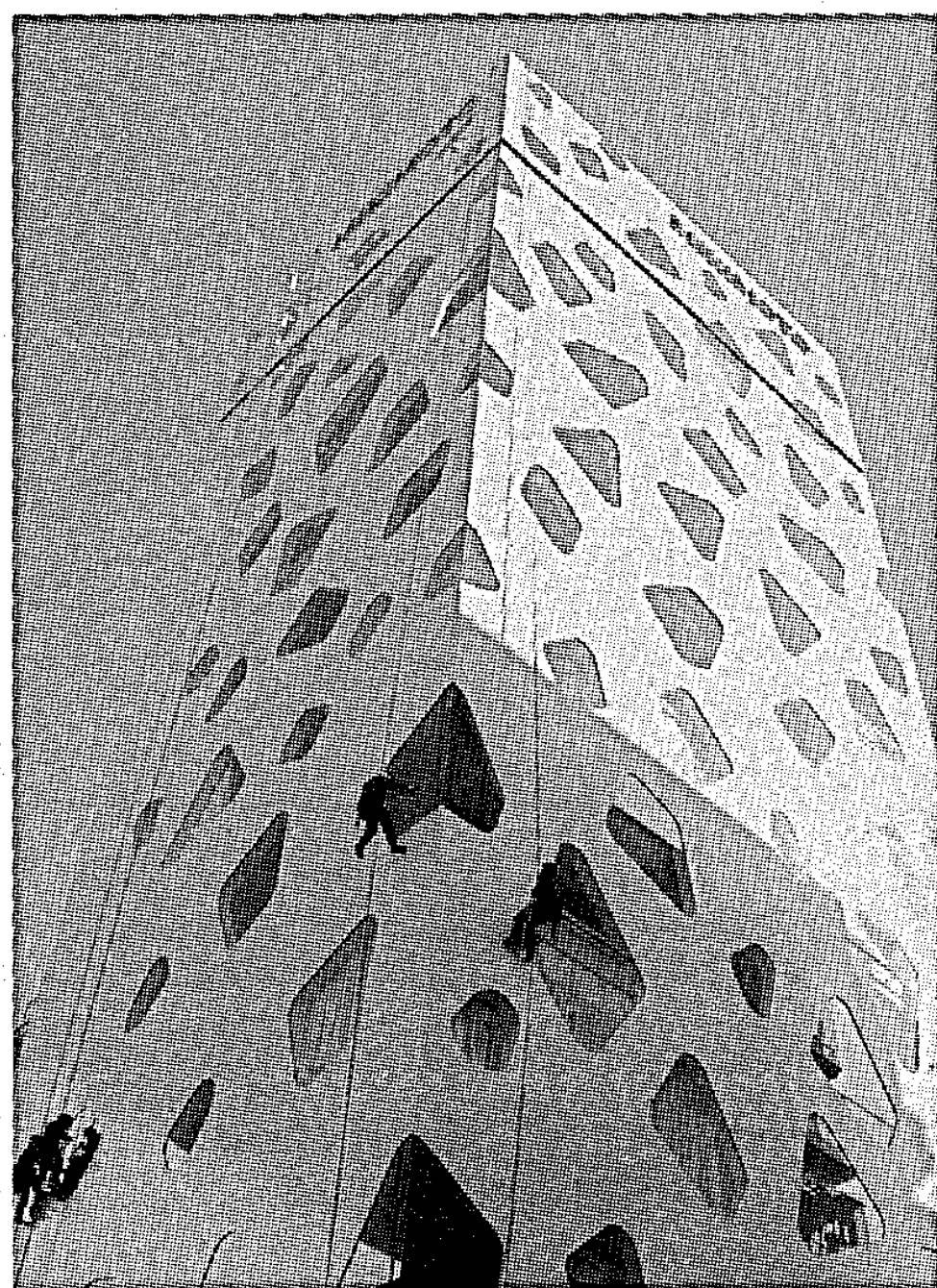


写真8 ミキモト銀座2(設計・伊東豊雄)

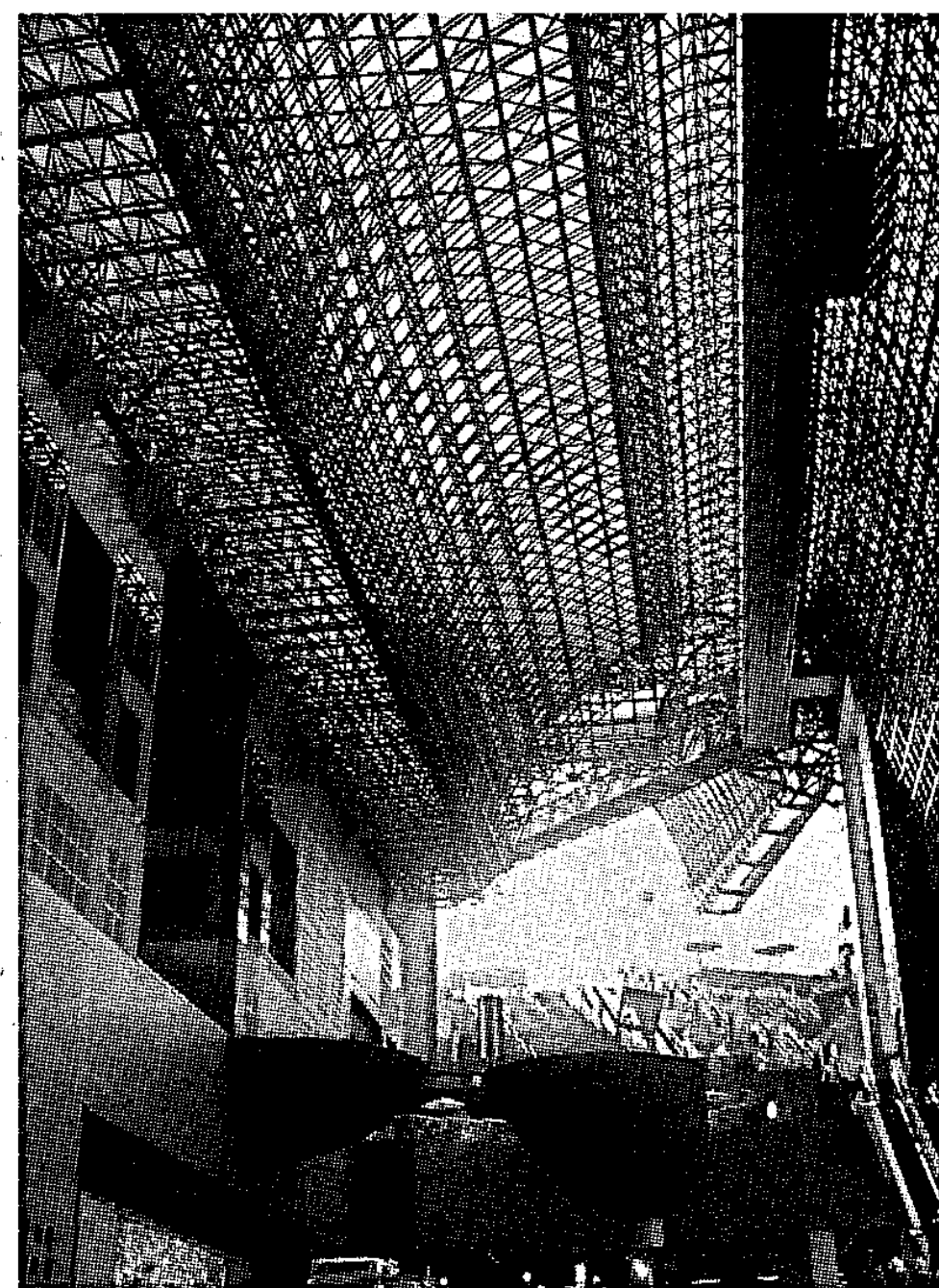


写真9 JR京都駅(設計・原 広司)

スト・ルノアール⁽¹⁶⁾は、日本で人気の高い画家。ほんのりとした色彩の絵に魅せられるのも、日本的感性に符合するからだろう。

5. 現代建築と光

陰翳の自然光を感じ取る繊細さ。こうした世界に誇れる財産が、現代の建築では、容易に切り捨てられている。都市の建築空間では、災害や機能性の面から、閉鎖的にせざるを得ない。また一方で、利便性、経済性優先で、光を直接的に「照明」という側面だけで捉え、単一的な空間になりがちである。言わば、木材で構築されてきた柱と柱の間の「間」が欧米的なコンクリート壁の「室」に置き換わってきた。

こうした中で、建築家の安藤忠雄⁽¹⁷⁾は日本の古典的建築の「光」を意識している。その作品の一つが「光の教会」⁽¹⁸⁾であろう。外の光が十字架に差し込み、打ち放しコンクリートの天井や壁をほのかに映し出す。光によって感じる季節や時間。古典的とも言える陰翳が見事に再現されている。

これに対して、現代的な視点からデザインされた、伊東豊雄⁽¹⁹⁾の「ミキモト銀座2」や原 広司⁽²⁰⁾の「JR京都駅」の作品などが挙げられる。

京都駅のことでは、内部空間は四六時中、さまざまな表情を見せ、夕暮れともなると駅全体が金色に輝く。色々なガラスを組み合わせた演出は、実に華麗である。ともあれ、自然光が生み出した豊かな空間⁽²¹⁾である。

一方、自然光の対極にあるのが人工光。その多くは、都市空間の中で競い合う商業施設。それは、街に華やきをもたせる光。その意図するのは千客万来。光の効果は極めて大きい。それゆえに高揚感をもたらす明るく鮮やかな光が流行（はやり）になってきている。

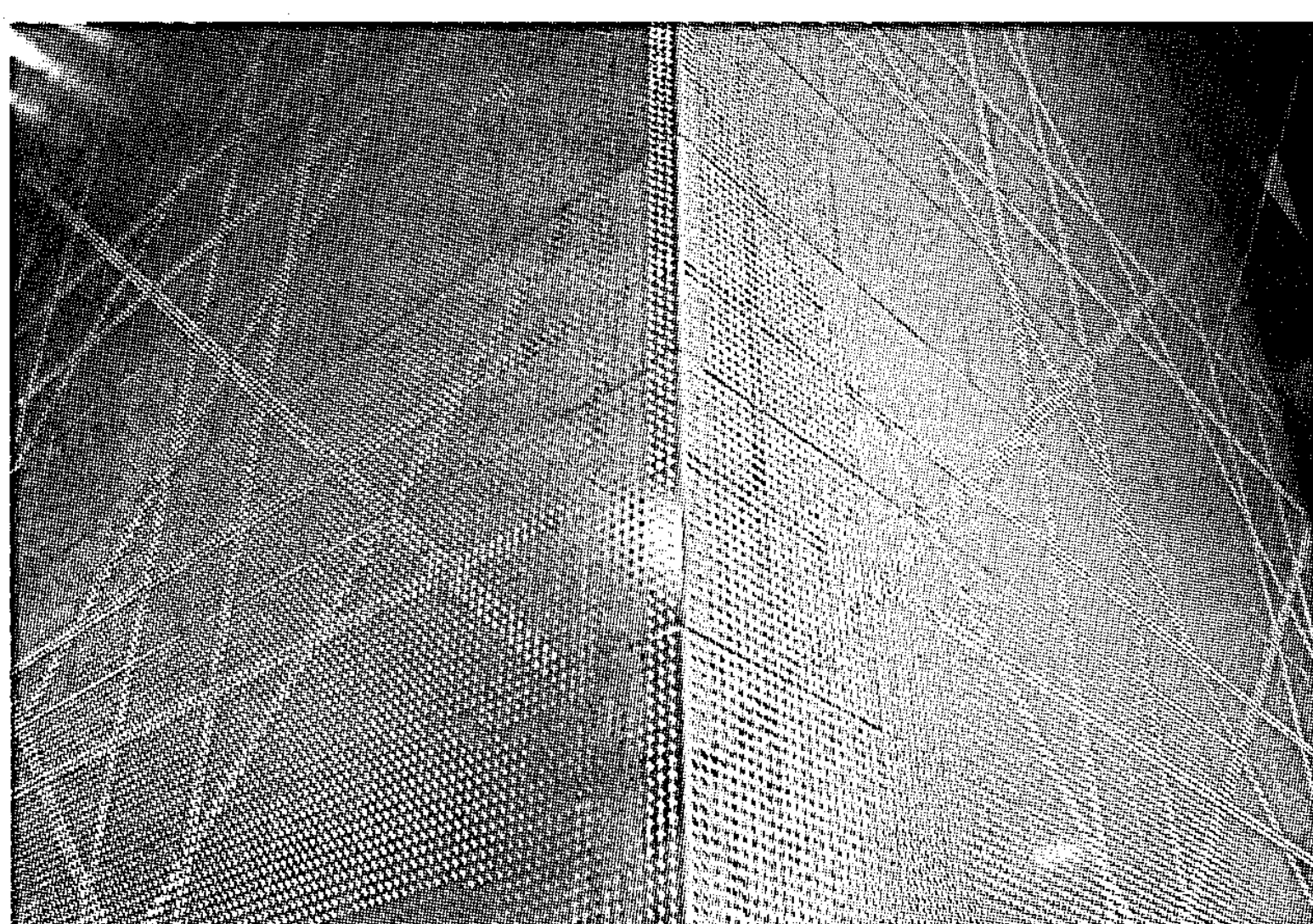


写真10 街を彩る光のファサード（東京銀座）



写真11 街を彩る光のファサード（東京銀座）

しかし、その中には、限度を超えた強烈な光が眩しさすら与えるものも存在している。

すなわち、昨今の建築は、人工光を直接的に「照明」という側面だけで設えているようにも見て取れる。

工業化や合理化の中で生まれた光からは、趣ある風景や心の豊かさを実感するには難しい。

せめても浴室を真っ暗にして、湯船にアロマオイルを

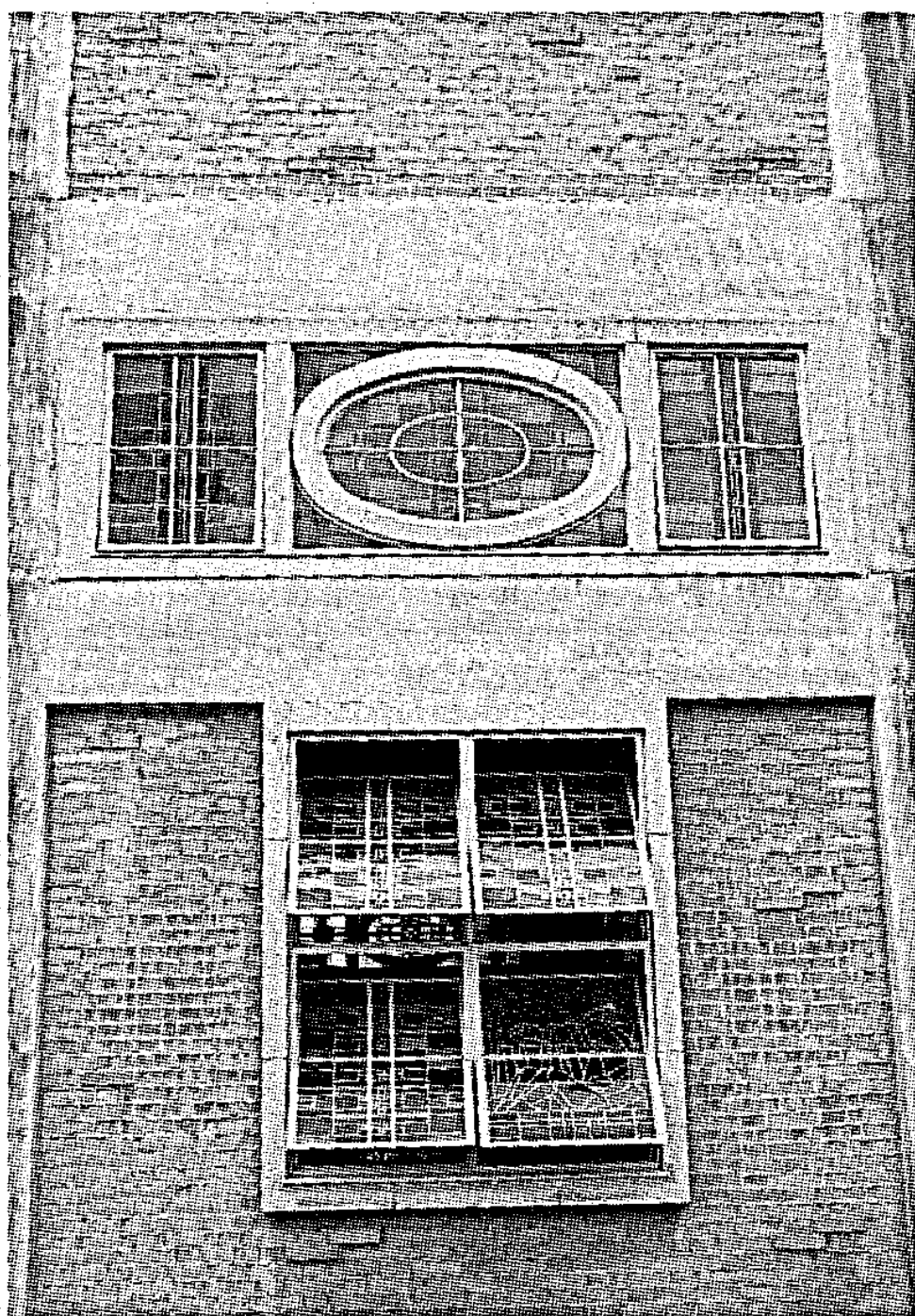


写真12 世界平和記念堂(設計・村野藤吾雄)



写真13 同 左 (内部)

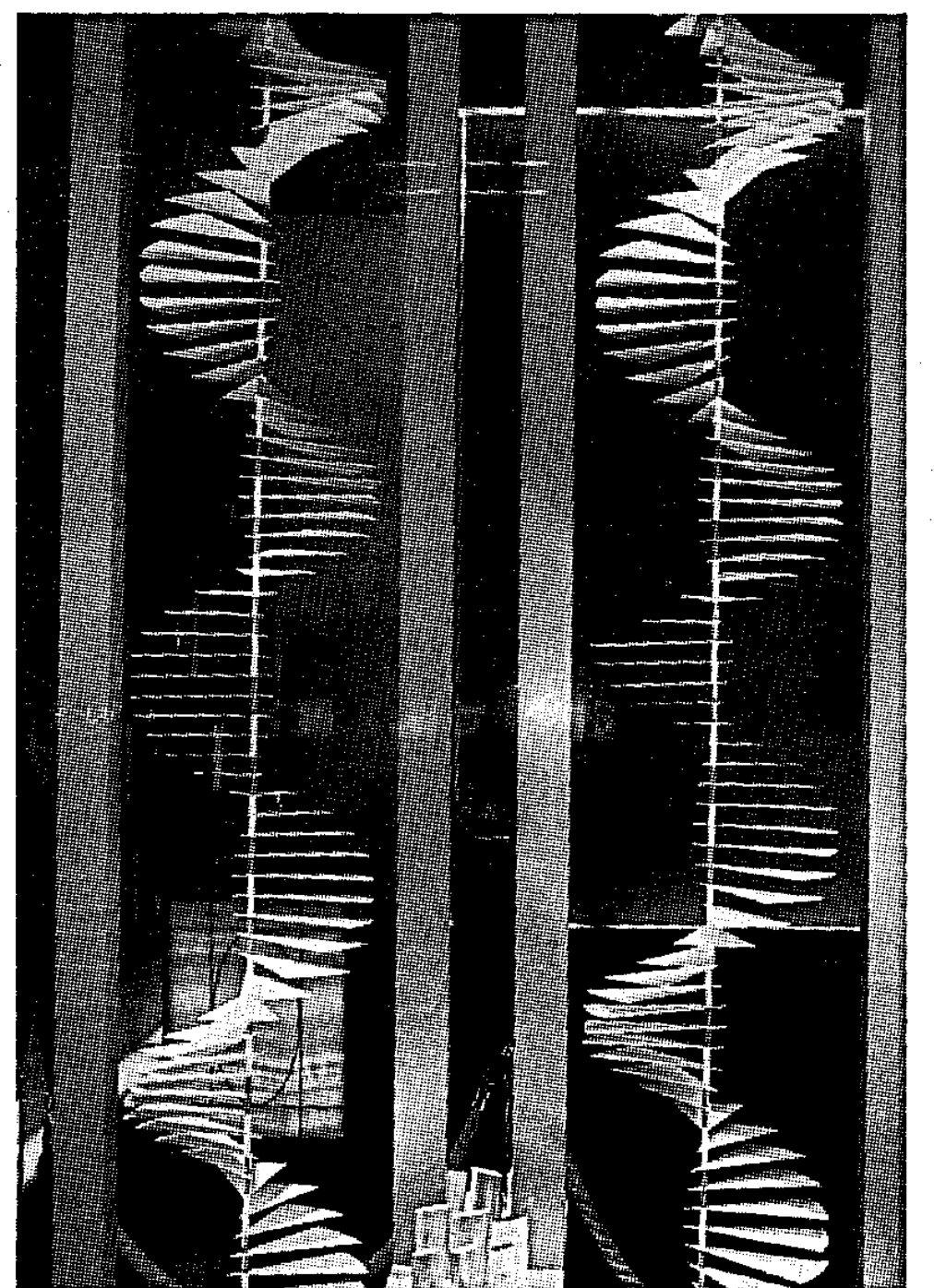


写真14 彩る光の演出(東京銀座・資生堂)

2、3滴。そしてオレンジや赤のろうそくで、揺らぐ炎の光に照らし出される湯気の美しさをじっくりと眺めてみたい。

むすびにかえて

一室一灯から、既成概念に捉われない現代へ。光やあかりは、建築空間において今後さらに新しい素材や技術で広がりをもたらすだろう。しかし、進歩した光技術を考えもなく無駄に浪費することは許されないことでもある。

それには、あかりのあり方を適切にとらえ、省エネルギーを踏まえた上での振舞いを創造していくべきものと考ええる。

ともあれ、「火のあかり」と「陰翳」に培われてきたわが国のあかり文化の精神性を、受け継いでいくことが賢明である。そして共通して言えることは、手作りのモノには魂が宿るということだ。その温もりが心を奪うのではないだろうか。

一つの例として、村野藤吾⁽²²⁾デザインの「世界平和記念聖堂(広島)⁽²³⁾」。この聖堂は、打ち放しコンクリートの柱と梁と、その間にはめ込まれたコンクリートレンガの壁で構成されている。一個ずつ、手で積み重ねられたレンガとその周囲に施されたモルタル目地。レンガの不揃いや壁面の凹凸が違和感を与えるどころか親しみを感じさせる。30年以上経過した今も壁面の凹凸が直射を和らげ、その反射光からも手の温もりが伝わってくる。

画一的に仕上げられる壁面ではそうはいかない。「モノづくりの原点は手作りにありき」と言えよう。

時を超えて、光とあかりは息づいている。

註]

- (1) 雪国あかり展：地元の毘沙門天十月会が市と観光協会の協賛を得て、2006年8月15日～24日に開催した。
- (2) 百八灯：江戸時代の世界最古の雪に関する書(北越雪譜)にちなんだ、しおざわ雪譜まつりの中で、献灯和蠟燭百八本のあかりが幻想的な美しさを創り出す。
- (3) 雁迎灯：毎年9月末、ロシアから渡り来るオオヒシク(雁)を地元の人々は約4,000本のろうソクを灯して迎え、幻想的な夕暮れの湯が浮かびあがる。
- (4) NIIGATA光のページェント：新潟市の冬の風物詩。新潟の長い冬を少しでも明るく楽しくしたい。そして何よりも子供たちに夢を与えたい。そんな願いからスタートした光の祭典。
- (5) 石油ランプ：明治時代に普及した灯火具で、金属製またはガラス製石油容器に口金をつけ、綿糸製芯を通して石油に浸し、毛細管作用により点灯する。
- (6) ガス灯：1872年(明治5年)横浜でわが国最初のカス灯が点灯され、カス灯には裸火(はだかび)が用いられていた。
- (7) 電灯：1878年(明治11年)3月25日、東京虎ノ門の工部大学講堂においてデュボスクアーク灯が点灯された。
- (8) あかりの今昔 ― 光と人の江戸東京史 ―：東京都江戸東京博物館
- (9) 谷崎潤一郎著：陰翳礼賛、中公文庫
- (10) ブルーノ・タウト(1880-1938)：ドイツ生まれの建築家・都市計画家。1933年5月、日本を訪れそのまま亡命。桂離宮と日光東照宮を対比させ、前者に

日本の伝統美を見出し「ニッポン」「日本美の再発見」などを著した。

(11) エドワード・S. モース (1838-1925) : 米国メイン州ポートランド生まれの生物学者。明治初期、東京大学での外国人教師として活躍。大森貝塚（東京都品川区・大田区）を発見。著書として「日本その日その日」、「日本人の住まい」がある。

(12) ル・コルビュジェ (1887-1965) : スイスで生まれ、フランスで活躍した建築家。ロンシャンの礼拝堂、ラ・トゥーレットの修道院、フィルミニの教会堂を設計。この三つの宗教建築は世界的に有名。なお、近代建築の巨匠として、エックスナレッジ社から「ル・コルビュジェー建築・家具・人間・旅の全記録」が出版されている。

(13) パンテオン : ローマ市内の丘に建造された神殿。118年から128年にかけて再建された現在のパンテオンは、上部直径43.2mの円堂と半球形のドームが載った構造。床からドーム頂部までの高さは直径と同じ。頂上部分に「目」と呼ばれる採光のための開口部が設けられている。

(14) ゴシック建築 : 1150年頃から1500年ごろまでフランスを発祥として花開いた建築様式。尖ったアーチや飛び控え壁などの工学的要素の基に、大規模かつ壮麗な聖堂が建てられるようになった。

(15) クロード・モネ (1840-1926) : パリ生まれの印象派を代表するフランスの画家。光の画家として時間や季節とともに移りゆく光の色彩の変化を生涯にわたり追及した。「日傘をさす女」や「睡蓮」など大作は多い。

(16) オーギュスト・ルノワール (1841-1919) : フランスのリモージュ生まれ。印象派の画家として、日本に早くから紹介され、「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」「イレーヌ・カーン・ダン・ヴェール嬢」などの

作品に愛好者は多い。

(17) 安藤忠雄 (1941-) : 大阪生まれの国際的建築家。独学で建築を学ぶ。打ち放しコンクリートによる禁欲的なデザインと、計算された光の効果により評価を得ている。新潟県内における氏の作品には「新潟市立豊栄図書館 (2000年)」がある。

(18) 光の教会 : 安藤忠雄の心が作った建物。正式名は日本キリスト教団茨木春日丘教会（茨木市北春日丘4-3-50）。

(19) 伊藤豊雄 (1941-) : 日本統治時代の京城に生まれる。国内外で活躍する建築家として、世界でも重要な建築家の一人としてみなされつつある。新潟県内における氏の作品には「長岡リリックホール」がある。

(20) 原 広司 (1936-) 神奈川県川崎市生まれ。東京大学生産技術研究所教授。JR京都駅の設計は、日本の鉄道駅舎として異例の国際指名コンペ方式により行なわれ、氏の設計案が採用され具現化（1997年竣工）した。新潟県内における氏の作品には十日町市の越後妻有交流館「キナーレ」がある。

(21) 自然光、豊かな空間 : 信濃川沿いに建つ新潟市民芸術文化会館（竣工1998年、設計・長谷川逸子）や朱鷺メッセ（竣工2004年、設計・槇 文彦）のホワイエには、水の都、柳の都としてウォーターフロントに相応しい自然光が差し込む。

(22) 村野藤吾 (1891-1984) : 佐賀県唐津市生まれ。日本を代表した建築家の一人。1967年には、文化勲章を受章。

(23) 世界平和記念聖堂 : 原子爆弾の犠牲になった人々の追悼と慰霊のために、また全ての国の人々の友好と平和の印として1954年完成。石丸紀興著「世界平和記念聖堂（相模書房）」がある。

※掲載写真は筆者の撮影による。ただし、写真1「百八灯」は新潟県南魚沼市の提供による。